

# 草庵仏教

第235号  
 (発行日)  
 2010年1月1日  
 発行所：真宗大谷派念佛寺  
 〒6638113 西宮市  
 甲子園口2丁目7-20  
 電話・FAX (0798)  
 63-4488  
 (発行人) 土井紀明  
 mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp  
 http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》  
 ○ 〈同朋の会〉  
 毎月22日午後2時  
 .....  
 ○ 〈念仏座談会〉  
 毎月2日および12日  
 午後3時より。  
 ○ 聖典共学会 --- 毎月6日。  
 午後7時より。  
 \* 8月22日同朋の会および8月12日念仏座談会は休みます

## 念仏は愚者の道

越前市のF師がある新聞に投稿されていたお話を読ませ

ていただき、いろいろ考えさせられた。そのお話の中で、  
 (あるお婆さん、  
 「先生、聞いてください。この間、孫に『汚い婆さんやな。早う死んでしまえ』っていわれたんです。もう腹が立って、立ってー」  
 T師

「そう、汚いじゃろうのう。年よるとみなこうなるんや。好きでなつたんじやないがのう。でも、ご縁のある間は置いてもらわんならんがね、よろしゅう頼むで」って、いえ

ばよかつたのにね」  
 このT師の話聞きF師は、(わが身の事実に立つこととのむずかしさを感じました。おそらく私がその婆さんだったら、同じように腹をたて、愚痴いっぱいになったことでしょう)、と感想を述べておられた。

私もF師と同じく腹を立て

ていただろう。

T師のいわれる『よろしゅう頼むで』というような応答のできる人は知恵ある人であり賢者であつて、私にはそういう応答はできそうもない。私はそういう智慧もなく、腹を立てるしかない愚かな者であるが、そう言われて辛いのは私自身だから、「辛かつたら念仏申せ」のお勧めのま

まにお念仏称えてさせていた

た。またF師はこんな話も載せておられた。  
 (ある婦人が「私は後妻で、一人の継子娘を育てました。やがて娘が結婚することになり、結婚式の前夜、これまでの思い出話を娘としていたところ『結局、私とあんたとは血のつながりはないんやから』といわれて、がくぜん。これまでの私の苦労は何だったのかと思うとー」と涙し

きり)  
 このご婦人にN師は

「そういわれたとき『その通りやね』とはいえなかつたんですか。あなたは、『長い間お育ていただいてありがとう』との言葉を娘さんから期待していたんでしよう。それはあなたの心の思いにすぎません。娘さんには娘さんの立場があつたのですよ」

このお話に対してF師は、(薄々その事実を感じていても、なかなかそれを認めたくないのが本音ではないでしようか)、と語っておられる。

実際私たちは事実よりも自分の思いを先に立ててしまふ。だから、なかなか事実を認めないのが本音であり、それが凡夫の地金である。事実には立たずに自分を中心にした思いで生きているか

### 平成22年度御年忌年回表

1周忌	平成21年亡
3回忌	平成20年亡
7回忌	平成16年亡
13回忌	平成10年亡
17回忌	平成6年亡
23回忌	昭和63年亡
27回忌	昭和59年亡
33回忌	昭和53年亡
50回忌	昭和36年亡

(23回忌と27回忌をせずに25回忌にいとむ数え方もあります。また50回忌以後は50年ごとになります)

ら、その破綻が苦悩となつて返ってくる。そういうことを性懲りもなしにくりかえしているのが愚悪の凡夫の姿である。

N師のいわれるようにその場で「その通りやね」と応答できる人は知恵者であり賢者であつて、そういう人の真似は私にはできそうもない。その婦人と同じような思いが湧いてきて悲しくなってしまう

## 謹賀新年

真宗大谷派 念佛寺

(責役・総代)

平成二十二年元旦

土井紀明 土井眞由実  
 中村穂積 迫田忠夫  
 宮野勲 中川政二

ほかないであろう。

T師やN師のお話は、本当にそのとおりだと思う。

しかし、相談者たちが訴える問題が実際に我が身にふりかかってくる時は、怒りや悲しみが先に立って、冷静で深みのある応答はその場でできようもない。また、たとえそういう応答ができたとしても、悲しみや悔しさや腹立たしさが内心にくすぼって、すぐには消えそうもない。

そんな私に、「我が名を称えよ」「悲しかったら悲しいまま念仏申せ」「腹が立ったら立ったまま念仏申せ」との仰せのまま、悲しいまま、腹が立つまま、ナムアミダブツ、ナムアミダブツとお念仏申させていただく道、お念仏を聞かせていただく道だけが愚かな私に残されている。

知恵者や賢者のような智慧もなければ応答もできない私に、「我が名を称えよ」の仰せがふりかかっている。煩惱が湧くまま、ナムアミダブツナムアミダブツと念仏申すばかりであり、お念仏を聞かせていただくばかりである。そこに「悲しかろうが私が

ともにいる」「辛かろうが私はあなたとともにいる」「そんなこと言われると腹が立つであろう。我が子よ、私はお前を離さない」との如来大悲のお心が、もやもやして悲しい心に流れて下さる。

『きたない婆さんやな。早く死んでしまえ』とか『結局、私とあんたとは血のつながりはないんやから』とか、そういわれて、何ともいえないやり場のない心が起こるのは、相手から突き放された怒りであり悲しみではなからうか。

この怒りに同悲し、この悲しみに同感して、（私はあなたとともにいる。我が子よ）との仏の大悲に触れる時、突き放された悲しみがやわらぐのではなからうか。

すると不思議にも、そういうひどいことを言う相手に対して、「しゃあない奴なあ」と、相手をなんとか受け入れるようなゆとりが出てくるのではないであろうか。

それが更に転じると、「ご縁のある間は置いてもらわんならんがね、よろしゅう頼むで」という態度にもなつてこようし、あるいは「娘には娘の立場があつたんやなあ」と、

相手の身にもなつていくのであろう。

しかし、こういう智慧はお念仏の大悲の智慧から与えられてくるのであつて煩惱だらけの私の心からは起こりそうもない。

知恵者や賢者の智慧を学んで、それを実生活の現場で応用できるかというところ、そうはなかなかいかない。それが愚痴の凡夫の有様ではなからうか。

愚痴の凡夫に与えられた道は、お念仏の道、（極重悪人よ、唯だ仏名を称えよ）の道ではなからうか。人生の智慧は愚かな凡夫の学習からはなかなか出てこない。与えられたお念仏にこもる大悲の智慧から与えられてくるのである。

ここにだれでもどこでも歩める一法がある。凡夫の本音、凡夫の地金に相応してくださったのが本願の念仏である。

念仏は智慧の念仏であるから、そこから私たちに智慧をたまわるのである。

(了)

# 正信偈に学ぶ問答

## (二十一)

### 本願名号正定業

至心信樂願為因  
成等覺証大涅槃

### 必至滅度願成就

書き下し文（本願の名号は正定の業なり。至心信樂の願を因とす。等覺を成り、大涅槃を証することは、必至滅度の願成就なり）

現代語訳（本願成就の名号は衆生を間違ひなく往生せしめたもう行であり、至心信樂の願に誓われている信を往生の正因とする。正定聚のくらしいにつき、浄土に往生してさとりを開くことができるのは、必至滅度の願が成就されたことによる）

G 「本願名号正定業の正定業とは何ですか」

D 「正（まさ）しく浄土へ生まれることの定まる業（はたらき）」という事です

G 「業とは行為ともお聞きしますが」

D 「もともと名号正定業は、称名正定業という善導大師のお言葉から来たのでしよう。

称名正定業とは、称名念仏は浄土に生まれることの定まる行いということですが、ですけど、それは私たちがお念仏を申す行いの功德によって浄土に生まれることが定まるのではなくて、私たちに称えられるお念仏の行いは、阿弥陀仏が私たちを浄土にまさしく生まれさせたもう阿弥陀仏の働きである、と聖人は教えて下さいます。それゆえ称名という人間の側の行為に重点を置いた言葉よりも、称えられる名号に重点を置いた名号正定業という言葉が聖人のお使いになつたのだと伺います。つまり、称えらるという人間の行為に救いの因があるのではなく、称えられる名号に救いの因があることを示されたのでありましょう」

G 「なぜ、人間の側に重点を置いた表現ではなくて、如来の側すなわち如来の名号その

ものに重点を置いた表現を聖人はされたのですか」

D 「人間の側の行いに重点を置く表現ですと、そのお念仏は、人間が往生の為に為す修行としての念仏、いわば自力の念仏に受け取られるおそれがあるからでしょう」

G 「そうすると称えられる名号は、正定業として、阿弥陀仏の救済の働きであると理解したらいいのですね」

D 「ええそうです。へ本願名号正定業」の本願名号とは、私どもを必ず浄土へ生まれさせるという大悲の願力の自己表現であるとの思し召しです」

G 「名号は願力の御名なのですね」

D 「ええ、そうなんです。その正定業である南無阿弥陀仏が、私どものお念仏となって称えられて下さるのです」

G 「南無阿弥陀仏と称えるところにすでに、私を浄土に必ず生まれさせて下さる働きが来て下さっているのですね」

D 「ええ。こうした阿弥陀仏の働きを本願力と申しますが、その本願力が私のところに働いて下さっています」

G 「本願力はどこにも見えませんね」

D 「ええ、本願の力は物質界の働きとして確認することはできないと思います。本願力は心の領域において心に感知されるものです」

G 「阿弥陀仏は私の心に本願力として働いてくださっているのですね」

D 「ええ、そう了解して下さっていいと思います。本願力は大悲の願心の働きです。私の心も見えませんが如来の願心も見えませんか」

G 「見えないのなら、どうしても私は本願力を知ることができないのでしょうか」

D 「阿弥陀仏の本願力は、ご自身を南無阿弥陀仏の名号いわば言葉として私たちに喚びかけて下さっています」

G 「私たちが浄土に生まれさせる本願力は、その働きを知らしめんがために、南無阿弥陀仏という言葉となって私たちを喚んで下さるのですね」

D 「ええ、ここが他のさまざまに、また非常にありがたいところですよ」

G 「へ浄土に汝を必ず生まれさせる、助ける」と喚んで下

さっているのですね」

D 「御和讃に  
弥陀観音大勢至

大願のふねに乗じてぞ

生死のうみにうかみつ

有情をよぼうてのせたまう

とあります。大願の船とは南

無阿弥陀仏のこと。南無阿弥

陀仏は私を乗せて浄土に運ん

でくださる船となって、私の

ところに来てへ助けるで乗れ

よ」と喚んで下さっているの

です」

G 「本願力が南無阿弥陀仏の

船となって喚んで下さる。そ

れが耳に聞こえる一声ひとこ

えのお念仏なのです」

D 「ええ、そうです。本当に

有難いことです」

G 「では、浄土への船に乗る

にはどうしたら乗れますか」

D 「私の力では迷いの海を渡

ることは到底できないと、自

分の力を見限って、阿弥陀様

の船に身をゆだねること

です」

G 「身をゆだねるとはどうす

ることですか」

D 「へそのままなりで助ける、

私をたのみにせよ」の南無阿

弥陀仏の喚びかけを聞き受け

ることです。聞き受けること

が阿弥陀仏に身をゆだねてい

ることになっているのです」

G 「聞き受けるとは」

D 「お聞かせ通りに聞くこと

です」

G 「お聞かせ通りに聞くとは」

D 「へ引き受ける、助ける」

とのお知らせを聞いて、へあ

あ助けて下さることよ」と

いただくばかりです。へ汝を

助ける」と知らされることで

す」

G 「へ助ける」のお知らせを

聞いているばかり、それが阿

弥陀様におまかせしているこ

とになっているのです」

D 「ええそうです。仰せを聞

いているほかに、あともさき

もないのです」

G 「仰せばかりなのですか」

D 「ええそうです」

G 「仰せを聞いているばかり

で、どうして助かるのでしょ

うか。あるいは浄土に生まれ

ることができるのでしょ

うか」

D 「仰せが聞こえている、そ

こに阿弥陀仏のお心と私の心

が離れないことが実感され、

実現されているのです。それ

を撰取不捨の利益といいま

す。阿弥陀仏のお心が私の心

と離れなくなり、阿弥陀仏の

お心が主体になって下さるの

です」

G 「阿弥陀仏のお心が主とな

って、私の煩惱の心が撰取さ

れるのです」

D 「ええ、そこに大いなる満

足があるのです。ただ、煩惱

によつて心の眼がさえぎられ

るので、阿弥陀仏が私の主体

になりたもうことを、ありあ

りとは感得できないもので

す」

G 「阿弥陀仏が主体であるこ

とはありありとは感得できな

いのです」

D 「ええ、少なくとも私にお

いては。見えるようにはあり

ありと知られない。けれども、

阿弥陀仏が主と知れるので

す。ほのかに、しかし確かな

ものとして知られるのです」

G 「どうして知れるのですか」

D 「阿弥陀仏は見えないけれ

どへここについている、汝の

親であるぞ、ナムアマダブツ

と聞かされて、知らされるか

らです。目の見えない子供で

も、寄り添う親の喚び声にお

いて、親の存在を知るような

ものです」

G 「阿弥陀仏に撰取されている

とは、そういう事態をいう

のです」

D 「ええそうです」

# 信心夜話

《松並念仏語録に聞く》二十一

ゴチツクの字が松並さんの言葉。

\*

○つながっている一如の世界である。そのつながった世界に身はありながら「俺が俺が」ときりはなす。この心、親は子あってよし、子は親あってよし、孫ありてよし、親あって愛される夫妻が出来たのである。皆々がよりよく集まって、善き家となり、善き国となる。

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

（人と人、人と自然、人と宇宙、すべてはつながりの中にありながら、私は切り離している。切り離して愛したり憎んだり、好いたり嫌ったりしている。どこどこまでもつながりの中で生きているお互いである。人を助けるとか、この世を救うというが、そう言っている私はこの世からどれほど助けて貰っているか、どれほど人のお世話になっているか。人々を助けるより人々に助けられている私）

○ある時、法が法を喜ぶ。お前は一代喜ばん、と知らされました。即ち喜ぶとは、私、仰せのまま、念仏聞くまま、称える姿を見て、仏様は「あ

ああ、おれの思う通りになってくれたか」と喜ばれる。そのまが喜んでい事になると。

「この南無阿

弥陀仏にて助けられる」と安心してござる。「間違いない」と安心してござる。その仏の安心が、私の安心となるだけ。南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

（よう南無阿弥陀仏にあつてくれた、と阿弥陀様が喜ばれ、阿弥陀様が南無阿弥陀仏でお前は助かると安心しておられる。その喜び、その安心が、喜びも安心もない煩惱だらけの私に映って下さるのですね）

○何事も南無阿弥陀仏様に遇わせて、頂いた南無阿弥陀仏の目で物事を見よ。我が心の目で見たら、喜ぶべき事まで腹立ちの種となる。南無阿弥陀仏の目で見れば、悲しみも喜びの種となる 南無阿弥陀仏。

（人生に不足や不安がたえないのは自我の眼だけで物事を見ているから。自我の眼しかない私に南無阿弥陀仏の眼を加えて下さる。南無阿弥陀仏がなかったら自我しか知らないから、自我の心でしか物事が受け取れなくなる。ともすると南無阿弥陀仏を忘れて自我の心に振り回されてしまう。自我の心とは自己中心的に物事を見

る心である。我が心よ、南無阿弥陀仏様から離れないでくれ、ナムアミダブツ。南無阿弥陀仏に護られ、念じられ、付き添われないと、我が心はどこへ行くか知れない。南無阿弥陀仏の眼で見れば、悲しみも喜びの種となって下さるのですね）

（了）

## 《住職雑感》

\*昨年十二月二十二日の念佛寺報恩講法要に先だつて、ご本尊様を絵像からお木像へとお迎えするご移徙法要を行った。このお木像は羽曳野市の大谷派寺院妙善寺にたまたましましたのを矢幡師がお世話をして下さったのである。それを修理しお洗濯して、報恩講当日に法要させていただいたのである。ご本尊は「木像よりは絵像、絵像よりは名号」といわれているから、名号が望ましいのである。ただご本尊の名号というのは、掛軸にして礼拝している名号がご本尊そのものかと言えようであるけれども、今口にお念仏となつて出て下さっているのが生きたご本尊である。だから礼拝の対象は絵像であつても、木像であつても、礼拝しお念仏するならば、お念仏のところにご本尊はましますのである。お念仏がご本尊であれば、礼拝の対象は絵像でも木像でも、あるいは文字の名号でも、差しかえないのではなからうか。要はお念仏申しているか、お念仏を聞いているかである。たとえ名号の文字を礼拝していても、その前でお念仏し、お念仏を聞かなかつたら、ただの文字としての名号を対象的に拝んでいるだけになりかねない。

\*最近、「いのち」という言葉で真宗の教えがしばしば語られる。確かに響きが良い。

しかし、いのちとは何かと一歩つっこんで考えると途端に不透明となる。ただ何となくすぐにイメージできるのは生命体としてのいのちである。いわば肉体として動いている生命体をまず考える。「いのちを大事にしよう」というと「この肉体的な生命を大事にすること。健康や安全に気をつけること」という発想になつてしまわないだろうか。また、「いのちの叫び」とか「輝けいのち」などの言葉には、全体的な自分とかなんかそのものを感じさせられるが、定義的には明瞭な言葉ではない。それゆえ、自然科学では「いのち」といわずに物質的な生体と意識とを分け、哲学では肉体と精神、身体と意識などと分けて捉えるのが一般である。そういう風に分けて捉えた西洋の哲学者がデカルトであり、そこから近代科学や近代哲学が生まれてきたといわれる。確かにその方が「いのち」という言葉で押さえるよりクリアだからである。デカルトの身心二元論は批判もされてきたが、しかし分かりやすいと思う。だいたい身心を分けて考える見方は仏教の初めからすでに説かれていたのであつた。五蘊（五つのあつまり）という考えである。これは釈尊がすでに説かれたものであろう。色・受・想・行・識の五蘊として有情（人間）を捉える。色は物質的要素いわば肉体であり、受想行識の四つは意識的な要素である。受は感受作用、想は想念作用、行は意志作用、識は識別作用、そういう要素の統合体が人間であるといわれるのである。仏教は心の要素を中心に見るので、受想行識の四種類にもなる。どちらにしろ仏教は最初から、物質的要素と意識的要素の統合体として人間存在を見ているが、これの方が「いのち」というより定義としては明晰で分かりやすいと思う。